「総合的な学習の時間」の英語活動において主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方に関する研究

－コンピュータ英語教材の開発をとおして－

滝沢村立滝沢第二小学校　教諭　**藤　田　君　夫**

Ⅰ　研究目的

国際化、情報化、科学技術の進展など変化の激しい時代に対応する教育の必要性が高まっている。その一つとして「総合的な学習の時間」の国際理解に関する学習があり、英語活動をとおして、主体的なコミュニケーション能力の育成や異文化との共生、自己の確立を図ることが重要である。

しかし、本校では、児童の主体的なコミュニケーション能力が十分育っているとはいえない。それは、英語教材や単元構想・指導計画がまだ整っていないなど、英語活動を推進する環境が整備されていないことによるものと思われる。

このような状況を改善するために、身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を開発し、日常生活場面での体験的な活動への活用を図ることにより、児童が積極的に他とかかわろうとする態度を促し、主体的なコミュニケーション能力を育成することができると考える。

そこで、この研究は、「総合的な学習の時間」の英語活動において、身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を開発し、授業実践をとおして、主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方を明らかにし、「総合的な学習の時間」の英語活動の指導の充実に役立てようとするものである。

Ⅱ　研究仮説

「総合的な学習の時間」の英語活動において、身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を活用すれば、主体的なコミュニケーション能力を育成することができるであろう。

Ⅲ　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　「総合的な学習の時間」の英語活動において主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方に関する基本構想の立案

(2)　基本構想に基づく指導プログラムの作成

(3)　基本構想に基づくコンピュータ英語教材の開発

(4)　授業実践及び実践結果の分析と考察

(5)　「総合的な学習の時間」の英語活動において主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方に関する研究のまとめ

2　研究の方法

(1)　文献法　　(2)　質問紙法　　(3)　テスト法　　(4)　授業実践

3　指導実践の対象

滝沢村立滝沢第二小学校　第６学年（男子57名　女子48名　計105名）

Ⅳ　研究の分析と考察

１　「総合的な学習の時間」の英語活動において主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方についての基本構想

(1)　「総合的な学習の時間」の英語活動において主体的なコミュニケーション能力を育成することについての基本的な考え方

21世紀を迎え、情報化、科学技術の進展、国際的な相互関係の深まりによって、日本の国際社会における役割が拡大している。このような状況に対応する教育の柱の一つとして、国際社会において相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意志を表現できる基礎的な力を育成する観点から、「外国語によるコミュニケーション能力の育成」があげられている。

外国語のなかで、英語は、世界のいろいろな場面で最も多く使われており、共通語的な役割も果たしている言語である。我が国においても、社会生活や家庭生活で児童が英語に触れる機会は多く、親しみやすい。「小学校英語活動実践の手引」（文部科学省）によると、小学校段階で英語に触れることは、異文化に触れる体験となり、さらに、外国の人や文化にかかわろうとするときの手段として、英語を活用しようとする態度を育成することにつながる。このように、小学校において外国語によるコミュニケーション能力を育成することは、発達段階にふさわしい重要な課題であるといえる。

「コミュニケーション」とは、「二者間以上の相互作用とし、言語や動作などを媒介として自分の考えや思いを表現し、相手の考えや思いを理解する過程」（新教育学事典）であり、この過程を支える言語や動作を媒介とする表現力や理解力、意欲・態度の複合されたものが「コミュニケーション能力」（同上）とされている。コミュニケーションにおいては、技術的な側面や対象、作用に注目が集まりがちであるが、その担い手である人間の主体性が重要である。さらに、児童の自ら学び自ら考える力として「外国語によるコミュニケーション能力」を育成するにあたっては、児童が主体となった体験をとおして実感を伴いながら理解を深め、児童の主体的な姿を育むように図ることが大切である。

以上のことから、本研究での「総合的な学習の時間」の英語活動における「主体的なコミュニケーション能力」を「英語に親しみ、相手の伝えたいことを理解し自分の伝えたいことを表現して、積極的に相手にかかわろうとする力」と定義する。

英語活動におけるコミュニケーション能力の構成要素は、「英語への興味・関心、意欲」「積極的に他とかかわろうとする態度」「簡単な英語を使う力」の三つととらえた。また、小学校段階にふさわしい体験的な活動をとおして児童の「主体的なコミュニケーション能力」が育成されていく過程では、【表－１】に示すような児童の姿があらわれると考える。本研究では、このような児童の状態を「英語活動において主体的なコミュニケーション能力が育成された姿」ととらえる。

【表－１】英語活動における主体的なコミュニケーション能力の構成要素と児童の姿

構成要素	児童の姿
英語への 興味・関心、意欲	○英語への興味・関心が高い ○英語の調べ学習への意欲が高い
積極的に 他とかかわろうとする 態度	○外国人への親近感をもっている ○相手の伝えたいことを理解しようとする ○自分の伝えたいことを表現しようとする
簡単な 英語を使う力	○活動に使う簡単な英語を聞き取ることができる ○活動に使う簡単な英語を話すことができる

(2)　「総合的な学習の時間」の英語活動において身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を活用する意義

勤務校の位置する滝沢村では、積極的に国際理解推進事業を展開している。そして、その担当教師として英語指導助手（Assistant Language Teacher、以後ＡＬＴとする）が配置されている。しかし、

指導計画や時間割の制限から、年間をとおしてＡＬＴがかかわるコミュニケーション能力の育成をねらった英語活動を行うことは難しい。また、英語活動を担任一人によって指導するためには、指導を支援する英語教材が不足している。コンピュータ教材の特徴であるマルチメディア機能や再現性、データの高速処理は、児童の学習意欲に応えられるような英語を豊富に収録し、視覚・聴覚による繰り返し学習に大変有効に活用できる。

そこで、マルチメディア機能によるＡＬＴの話す英語を教材化したコンピュータ英語教材を活用することは、有効な手だてであると考える。

(3)　「総合的な学習の時間」の英語活動において身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を活用する指導の在り方

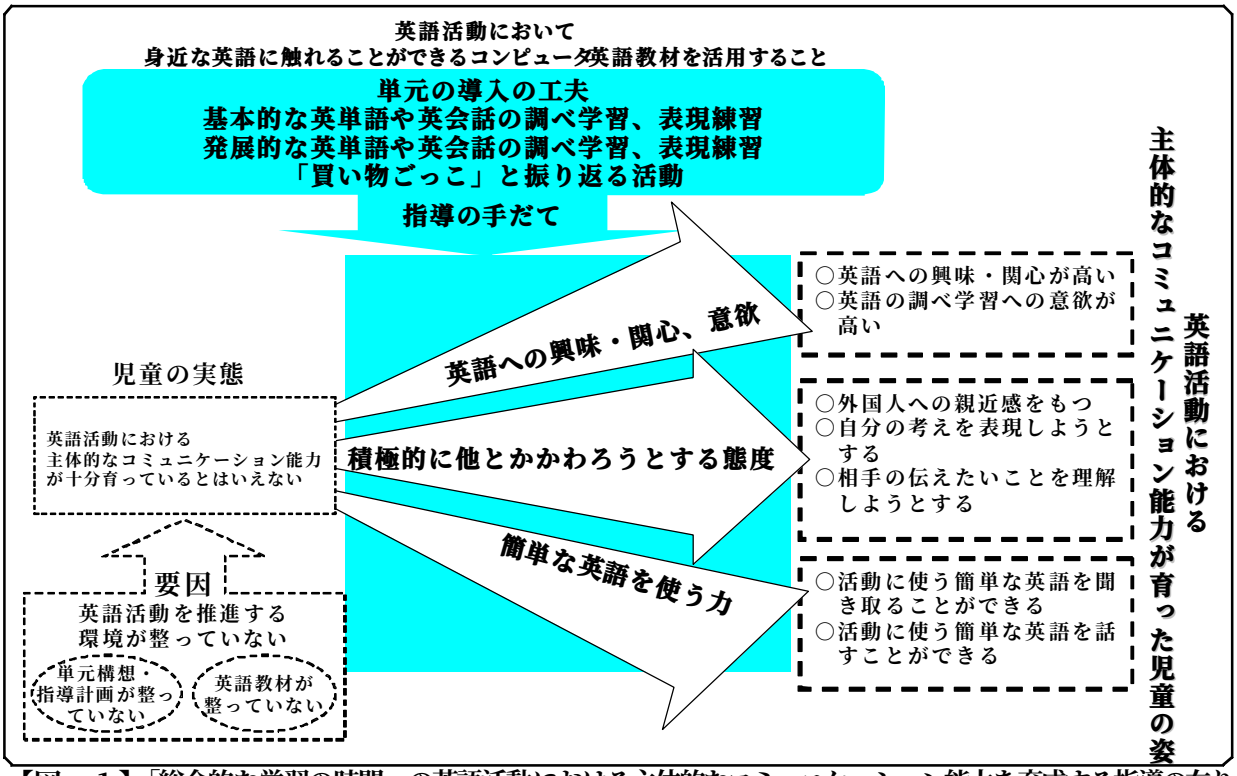
指導にあたっては、児童一人一人が課題に応じて英語に触れながら、コミュニケーションを図ることができた喜びを味わうことができるように図ることが重要である。

本研究では、小学校の発達段階と児童の負担を考慮し、コミュニケーションの主な媒介である音声と文字のうち、音声を中心に取り扱うこととする。そして、児童の日常生活場面での身近な英語を取り扱い、慣れ親しむことができるようにすることが大切である。

また、児童の日常生活場面において、買い物は、身近な体験的活動の一つである。さらに、目的意識がはっきりしており、相手とのかかわりが重要な部分を占めることから、主体的なコミュニケーション能力を育成する体験的な活動として適していると考える。そこで、身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を体験的な日常生活場面の一つである「買い物活動」で活用する。

(4)　基本構想図

基本構想に基づく基本構想図を【図－１】に示す。



【図－１】「総合的な学習の時間」の英語活動における主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方についての基本構想図

２　基本構想に基づく指導プログラムの作成

本資料では、単元の指導計画に指導の手だての段階を位置付けた「単元の教材構造図」を【図－２】に示す。

3　基本構想に基づくコンピュータ英語教材の開発

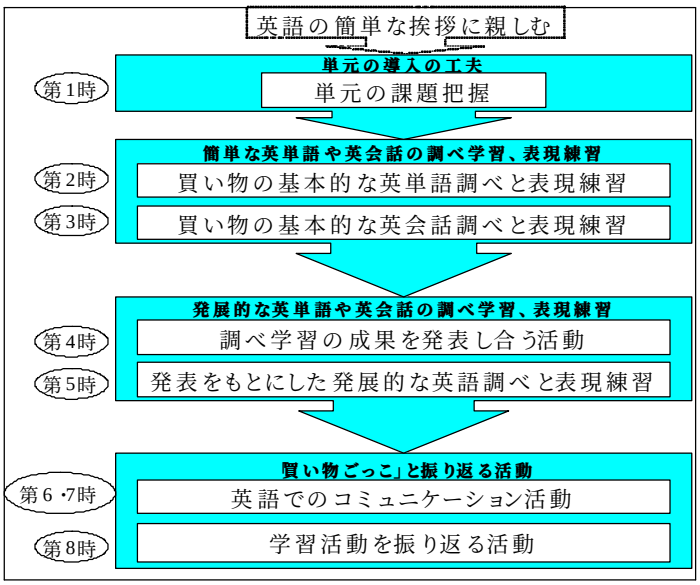
英語活動における主体的なコミュニケーション能力を育成する指導への活用をめざし、開発したコンピュータ英語教材は、以下のとおりである。

(1)　コンピュータ英語教材開発の目標

ア　児童の英語活動に対する興味・関心を高め、持続できる内容にすること

イ　必要な英語を調べやすく、練習しやすい構成と高い操作性にすること

ウ　コミュニケーションに必要な英語を明瞭な映像・音声で収録すること



【図－２】手だての段階と単元の教材構造図

(2)　コンピュータ英語教材の開発の概要

基本構想に基づくコンピュータ英語教材の概要を【図－３】に示す。

【図－３】コンピュータ英語教材の概要

(3)　コンピュータ英語教材の内容

このコンピュータ英語教材は、マルチメディアデータの扱いやすさや汎用性の高さから HTML と JavaScript で開発した。小学生にふさわしい英語に触れることができるように、滝沢村教育委員会所属のＡＬＴ二人の協力のもとに内容を検討・精選し、ＡＬＴと帰国子女児童による映像と音声を中心にしたマルチメディア教材として開発した。また、制作協力者の肖像権、ＢＧＭ、参考スクリプトの著作権については、許諾を受けて開発した。

４　検証計画

基本構想に基づく授業実践をとおして、コンピュータ英語教材を活用する指導の手だての妥当性をみるために、【表－２】に示したような検証計画の概要をもとに検証を進めることとする。

【表－２】　検証計画の概要

検証項目	検証内容	検証方法と処理・解釈の方法
英語活動における主体的なコミュニケーション能力の変容状況	ア　英語への興味・関心、意欲 (ｱ)　英語への興味・関心 (ｲ)　英語の調べ学習への意欲	評定尺度法による質問紙法で事前及び事後に行い、順位尺度を設けた調査をサイン検定、間隔尺度を設けた調査をｔ検定により分析し、考察する
	イ　積極的に他とかかわろうとする態度 (ｱ)　外国人への親近感 (ｲ)　相手の伝えたいことを理解しようとする態度 (ｳ)　自分の伝えたいことを表現しようとする態度	
	ウ　簡単な英語を使う力 (ｱ)　活動に使う簡単な英語を聞き取る力 (ｲ)　活動に使う簡単な英語を話す力	コンピュータを用いた調査を事前及び事後に行い、ｔ検定により分析し、考察する
手だてに関する調査	ア　コンピュータ英語教材を使った単元に関する意識 イ　コンピュータ英語教材の操作性と有用性	自由記述の調査を事後のみに行い、記述内容を分析し、考察する

５　授業実践及び実践結果の分析と考察

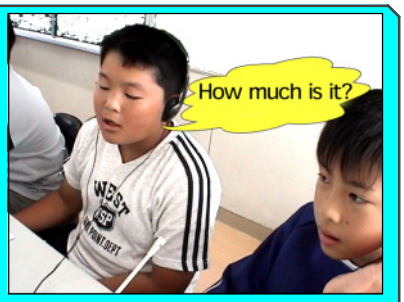
(1)　コンピュータ英語教材の活用を取り入れた授業実践の概要

基本構想に基づき作成した指導プログラムに従い授業実践を行った。指導の手だてと授業実践の概要を【図－４】～【図－７】に示す。（※吹き出しは授業中、枠は自由記述より）

A：会話には、しゃべる、聞く、相手がいること、コミュニケーションが大事だと言うことがわかった。
B：小学４年生の子も英語をしゃべれていたので、６年生の私も、ちょっとずつでいいので、英語が話せるようがんばっていきたい。

【図－4】単元の導入の工夫（第1時）

C：ふつうだとつまんないけどパソコンでやったらけっこうたのしかった。
D：一人一人英語を言い合ってみてきんちょうしたが、楽しかった。
E：何十回も「すいりしょうせつ」の英語を聞いたけど、すぐ忘れてしまったから残念だった。「猫」の英語はわかった。



【図－5】基本的な単語と会話の調べ学習、表現練習（第２・３時）

F：すこしだけ、コンピュータを聞かなくても言えるようになったので、よかった。
G：ちょっとわすれたりしたけど、前よりも、けっこうおぼえてきたし、はっきり言えるようになってきたので、よかったです。

【図－6】応用的な単語と会話の調べ学習、表現練習（第4・5時）

H：会話と手ぶりをがんばった。
I：英語がしっかり伝わるように、ハキハキはなすようにがんばった。
J：　なるべく英語で話した。ALTの先生のまねをしてしゃべったし、人の話すことをきちんと聞けた。

【図－7】「買い物ごっこ」（第6・7時）振り返る活動（第8時）

(2)　「総合的な学習の時間」の英語活動における主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方に関する研究の実践結果の分析と考察

基本構想に基づく指導の手だての妥当性を、検証計画に従って以下のように分析し、考察した。

なお、本実践中に欠席・早退等のあった児童は除外し、調査対象は101名とした。

ア　英語への興味・関心、意欲の変容状況

(7)　英語への興味・関心

【表－３】【表－４】は、英語への興味・関心の意識についての調査結果である。サイン検定の結果、「英語の時間は好きか」「英語で話す学習は好きか」の両方において、事前と事後の差は、有意であった。【図－８】は、興味・関心にかかわる言葉へのイメージを点数化し、事前と事後の平均値をグラフ化及びその差をｔ検定で分析したものである。この結果から、「必要」「役に立つ」「楽しい」「好き」のイメージにおいて、事前と事後の差が有意であった。

【表－３】の「英語の時間は好きか」では、実践前の「－－」の回答の11人は、「－」へ６人、「＋」へ４人、「＋＋」へ一人と全員プラス方向へ変容している。さらに【表－４】の「英語で話す学習は好きか」では、実践前の「－－」回答や「－」回答がプラス方向へ大きく変容している。このことから、特に実践前に低かった「英語を話す学習」に対する親しみやすさが、実践後は大きく変容していることがわかる。これは、単元の導入でＡＬＴと帰国子女児童の模範映像・音声をもとに開発したコンピュータ英語教材を活用し、英語を身近に感じるようにしたことと、英語で買い物ができるようになることを価値付け、活動内容を具体的にとらえるようにしたことによると思われる。これらのことは、第１時の授業後の感想に「コンピュータ英語教材を使うことが楽しみ。」や「小学４年生もしゃべっているから自分もできるようになりたい。」というような記述が多くみられたことや、【図－８】の「楽しい、好き」という「英語に対する好感度」のイメージが良くなっていることからもわかる。また、単元終了時の自由記述に「コンピュータ英語教材を使う楽しさの実感」「自分もできた満足感」と分類されるのが多くあったことや【図－８】の「必要、役に立つ」という「英語の価値付け」のイメージが良くなっていることからも裏付けられる。

以上のことから、単元の導入で英語を身近に感じ、英語での「買い物活動」を価値付けるようにコンピュータ英語教材を活用したことは、英語への興味・関心を高めることに有効であったと考えられる。さらに、単元をとおしてコンピュータ英語教材を活用したことは、児童が英語への興味・関心を高く持続していくことに有効であったと考えられる。

【表－３】英語の時間は好きかどうかの調査　(n=101)

		P2事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
P1事前	＋＋	13	1	0	0	14	4.76	＊
	＋	17	31	5	2	55		
	－	0	15	6	0	21		
	－－	1	4	6	0	11		
	計	31	51	17	2	101		

注(1)事前調査は９月 10 日、事後調査は 10 月１日に実施。(2)反応は、＋＋を最上位とする４段階に分けた。(3)有意差の欄の＊は有意水準 5%で有意差があることを表す。(4)サイン検定の公式は次の通りである。

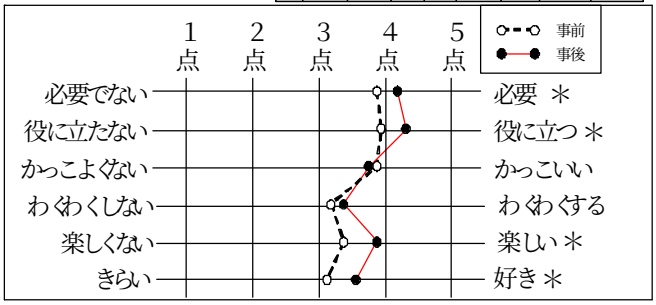
P_1 から P_2 への「＋変化」を L_1
P_1 から P_2 への「－変化」を L_2

$$Z=\frac{|L_1-L_2|-1}{\sqrt{L_1+L_2}}$$

とする。(5)以下、本研究におけるサイン検定の方法は、この通りとする。

【表－４】英語で話す学習が好きかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	6	2	0	0	8	6.65	＊
	＋	7	13	1	1	22		
	－	6	28	7	3	44		
	－－	0	9	14	4	27		
	計	19	52	22	8	101		



注(1)事前調査は９月 10 日、事後調査は 10 月１日に実施。(2)各形容的な言葉の横に記した＊は、有意水準5%で有意差が認められることを表す。(3)t 検定の公式は、次の通り。

$$t=\frac{(\overline{X_2}-\overline{X_1})}{\sqrt{\frac{S_1^2+S_2^2-2rS_1S_2}{n-1}}}$$

$\overline{X_1}$ =事前の平均
$\overline{X_2}$ =事後の平均
S_1 =事前の標準偏差
S_2 =事後の標準偏差
r=相関係数　　n=人数

(4)以降、本研究における t 検定の方法は、この通りとする。

【図－８】英語に対するイメージの調査結果（ｎ＝101）

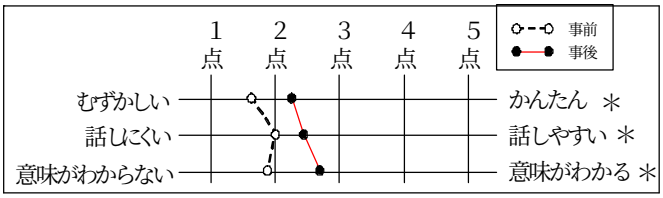
(ｲ)　英語の調べ学習への意欲

【表－５】は、英語の調べ学習への意識についての調査結果である。サイン検定の結果、事前と事後の差は有意であった。また、【図－９】は、英語の調べ学習に対するイメージの調査結果である。t検定の結果、「かんたん」「話しやすい」「意味がわかる」において事前と事後の差は有意であった。

【表－５】英語を自分で調べるかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	0	1	1	0	2	5.63	＊
	＋	6	11	3	1	21		
	－	2	18	9	3	32		
	－－	4	11	14	17	46		
	計	12	41	27	21	101		

【表－５】の「英語を自分で調べるかどうか」の意識では、実践前に「－－」回答が46人いたのが、実践後には21人に減り、「＋」へ11人、「＋＋」へは４人と大きく変化している。



【図－９】英語の調べ学習に対するイメージの調査結果

また、「英語の調べ学習への親しみやすさ」を「かんたん、話しやすい、意味がわかる」というイメージで調査したところ、【図－９】のように、あまり良くなかったイメージからやや良いイメージへ高まっている。これは、ＡＬＴがかかわらない調べ学習や個人練習の段階において、英語に触れる手段としてコンピュータ英語教材を位置付けたことが、児童にとって特に有効な手段となったからであると思われる。授業後の自由記述でも、「コンピュータ英語教材で調べたり、勉強したりすると英語がわかりやすい」に代表される記述が多かった。

以上のことから、コンピュータ英語教材を活用して英語の調べ学習、表現練習を指導するという手だては、英語の調べ学習への意欲を高めるうえで、有効であったと考えられる。

イ　積極的に他とかかわろうとする態度の変容状況

(ｱ)　外国人への親近感

【表－６】～【表－８】は、外国人に対する意識の変容の調査結果である。サイン検定の結果、三つの設問において、事前と事後の差は有意であった。【図－10】は、ア－(ｱ)と同じ方法で外国人に対するイメージの推移をｔ検定で分析したものである。その結果、「楽しい、優しい、積極的、近寄りやすい、好き、友だちになりたい」というイメージにおいて事前と事後の差は有意であった。

【表－６】外国人に対して、自分から挨拶したり、話しかけたりするかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	1	0	0	0	1	5.46	＊
	＋	6	9	6	0	21		
	－	3	17	14	4	38		
	－－	1	13	15	12	41		
	計	11	39	35	16	101		

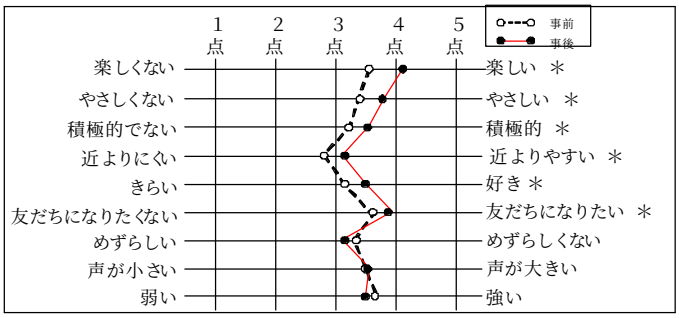
【表－７】外国からの転校生に自分から話しかけたり、遊んだりするかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	13	4	0	0	17	4.48	＊
	＋	24	34	3	1	62		
	－	2	14	3	1	20		
	－－	0	0	2	0	2		
	計	39	52	8	2	101		

【表－８】給食時間にＡＬＴと一緒に食べたいかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	27	7	0	0	34	2.11	＊
	＋	9	21	4	1	35		
	－	1	12	10	0	23		
	－－	2	1	1	5	9		
	計	39	41	15	6	101		

【表－７】と【表－８】では実践前に「＋＋」と「＋」回答がすでに多かったものの、外国人に対する接し方において、望ましい方向への変容が顕著である。【図－10】の「めずらしくない、声が大きい、強い」という表面的なイメージでは、プラス傾向のまま大きな変化はない。しかし、「楽しい、優しい、積極的、近寄りやすい、好き、友だちになりたい」の内面的なイメージは、相手の外国人の人格を認めて、外国人との接し方の意識が本質的に高まることができたといえる。これは、教材に収録したＡＬＴに慣れ親しむことと、「買い物ごっこ」で他の５人のボランテ



【図－10】外国人に対するイメージの調査結果

ィア英語講師と触れ合うことを手だてとして位置付けたからであると思われる。さらに、振り返る活動では、ＡＬＴやボランティア講師への感謝の気持ちを発表し合ったり、将来の外国人との接し方についての意見交流をしたりした。そのときの発言に「外国人に会ってもあまり緊張しないと思う。」とか、「外国へ行って仕事をしてみたい。」で代表される反応がいくつもみられた。その結果、授業後には発言者だけではなく、さらに多くの児童が同様の記述をしていた。

以上のことから、ＡＬＴの協力のもとに開発したコンピュータ英語教材を活用したこと、ボランティア英語講師の協力による体育館での「買い物ごっこ」、まとめの時間の振り返る活動という指導の手だては、外国人への親近感を深めるうえで有効であったと考えられる。

(ｲ)　相手の伝えたいことを理解しようとする態度

【表－９】～【表－12】は、相手の伝えたいことを理解しようとする意識の調査結果である。サイン検定の結果、四つの設問すべてにおいて、事前と事後の差は有意であった。

【表－９】の「相手の表情や身ぶり手ぶりをよく見る」ことの意識が高まり、【表－10】のように「相手の話すことがよく聞き取れなかったときやわからないとき聞き返す」意識においては、「－－」回答51人のうち、11人が「－」へ、24人が「＋」へ、14人が「＋＋」へと大きく変化しているのがわかる。さらに、【表－11】の「英語を聞いて理解することの自信」の大きな高まりと併せて、【表－12】の「英語で話しかけられたとき、進んで聞いてあげる」意識も高まったと思われる。

【表－９】相手の表情や身ぶり手ぶりをよく見て聞くかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	13	2	1	0	16	6.13	＊
	＋	8	18	2	1	29		
	－	4	18	5	1	28		
	－－	8	14	5	1	28		
	計	33	52	13	3	101		

【表－10】相手の話すことがよく聞き取れなかったときやわからないとき、聞き返すかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	4	0	0	0	4	8.85	＊
	＋	8	4	0	1	13		
	－	16	13	3	1	33		
	－－	14	24	11	2	51		
	計	42	41	14	4	101		

【表－11】英語を聞いて理解することの自信があるかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	2	0	0	0	2	7.88	＊
	＋	1	6	2	0	9		
	－	2	22	7	2	33		
	－－	0	25	25	7	57		
	計	5	53	34	9	101		

【表－12】英語で話しかけられたとき、進んで聞いてあげるかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		＋＋	＋	－	－－	計		
事前	＋＋	7	4	0	0	11	6.16	＊
	＋	10	11	5	0	26		
	－	4	18	5	1	28		
	－－	4	19	9	4	36		
	計	25	52	19	5	101		

これらのことは、コンピュータ英語教材を活用して調べ学習、表現練習を指導するという手だてによって、一斉授業のなかの個別学習を可能にしたからであると思われる。児童は、自分のペースで何度も繰り返して聞き、表現練習できたことで、活動に使う簡単な英語に十分慣れ親しむことができ、ある程度自信をもってお互いに練習し合う活動や「買い物ごっこ」に取り組むことができた。自由記述をみると、実践前は「英単語をたくさん覚えたい。」という言語習得のみの意識が強かったのが、単元の第３時前後から、「相手の英語を聞いてわかるようになりたい。」というコミュニケーションへ意識が向いた児童が多くなったことがわかる。また、「買い物ごっこ」では、ほとんどの児童が積極的に店の人側の会話やＡＬＴの故郷の名物を買い求めるという実際の場面に近い状況に挑戦していた。これは、自己評価カード（【図－11】のように「買い物ごっこ」で記入できるようにした）からも確かめられた。児童は、ＡＬＴとボランティア講師らと人間同士としてかかわり、コミュニケーションを成立できた成就感、満足感を得ていた。

【図－11】自己評価カードに記入して英語での買い物に挑戦した児童

以上のことから、コンピュータ英語教材を活用して高めた英語の表現力についての自信をもとにお互いに練習し合う活動や実際の場面に近い状況を設定した「買い物ごっこ」を行うという指導の手だては、相手の伝えたいことを理解しようとする態度の育成に有効であったと考えられる。

(ｳ)　自分の伝えたいことを表現しようとする態度

【表－13】～【表－16】は、自分の伝えたいこと表現しようとする意識についての調査結果である。サイン検定の結果、四つの設問において、事前と事後の差は有意であった。

【表－13】自分の表情や身ぶり手ぶりを意識するかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		++	+	−	−−	計		
事前	++	2	1	1	0	4	7.56	＊
	+	4	4	3	0	11		
	−	4	21	10	1	36		
	−−	5	27	14	4	50		
	計	15	53	28	5	101		

【表－14】相手をよく見て、はっきりした声で話しかけるかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		++	+	−	−−	計		
事前	++	4	1	0	0	5	7.96	＊
	+	4	6	4	0	14		
	−	9	13	5	0	27		
	−−	5	33	15	2	55		
	計	22	53	24	2	101		

【表－15】英語で話すことの自信があるかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		++	+	−	−−	計		
事前	++	0	0	0	0	0	7.62	＊
	+	2	7	1	0	10		
	−	3	12	9	3	27		
	−−	1	33	20	10	64		
	計	6	52	30	13	101		

【表－16】英語で話しかけられたとき、進んで話しかけるかどうかの調査

		事後					検定値	有意差
		++	+	−	−−	計		
事前	++	1	0	0	0	1	8.10	＊
	+	4	4	3	0	11		
	−	2	19	9	0	30		
	−−	3	27	21	8	59		
	計	10	50	33	8	101		

自分の伝えたいことを表現しようとする態度のうち、初期の段階にあらわれると思われる「身ぶり手ぶりを意識すること」は、実践前の「－－」回答の50人が、実践後「－」へ14人、「＋」へ27人、「＋＋」へ５人と大きく変化している。「相手をよく見て、はっきりした声で話しかけるかどうか」「英語で話すことの自信があるかどうか」「英語で話しかけられたとき進んで話しかけるかどうか」の意識においても実践前には「－－」「－」回答が多かったが、実践後では望ましい傾向への変容が顕著であった。このことは、「コミュニケーションに必要な英語を明瞭な映像・音声で収録すること」を目標としてコンピュータ英語教材を開発したことにより、表情や身振り手振り、視線を合わせて話すことを児童が自然と取り入れようとすることができたことや、「言葉がわからないから無理だ。」という消極性を克服でき、積極的に自分の伝えたいことを伝えようとする姿勢を促したからであると考えられる。このことは、「買い物ごっこ」で積極的に英語で話しかけている児童の姿がみられたことや、単元後半には「英語の自信がついた。話せるようになった。これからは話しかけたい。外国に行っても大丈夫だと思う。」というような自由記述が目立って増えてきたことからもわかる。

以上のことから、ＡＬＴの表情がわかるコンピュータ英語教材を活用して、表情を意識させて自分のペースで会話練習を行う指導と、「買い物ごっこ」という手だては、自分の伝えたいことを表現しようとする意識が望ましい方向へ変容することに有効であったと考えられる。

ウ　簡単な英語を使う力の変容状況

英語活動における主体的なコミュニケーション能力を構成する理解力と表現力の変容状況をみるために、設問内容と評価基準を二人のＡＬＴの助言のもとに精選・設定し、コンピュータプログラムによるヒアリング・スピーキング調査を実施した。

(ｱ)　活動に使う簡単な英語を聞き取る力

【表－17】は、活動に使う簡単な英語を聞き取る力の調査の結果である。ｔ検定の結果、事前と事後の差は有意であった。

【表－17】活動に使う簡単な英語を聞き取る力のヒアリング調査の結果

	$\overline{X}$	S	t 値	有意差
事前	5.56	10.86	36.99	＊
事後	86.56	20.41		

注(1)検定方法は【図－8】と同じ

事前テストでは、日常生活や前年度までの国際理解の学習で触れたような英語でも聞き取ることができない児童が多かった。しかし、事後テストでは、活動に使った英語から推測して多くの児童が聞き取ることができていた。これは、コンピュータ英語教材の再現性と高い操作性によって、児童は、何度でも遠慮することなく活動に使う英語に触れることができたからであると思われる。また、「発展のページ」を活用したり、【図－12】のようにボランティア講師とかかわりながら、二人のＡＬＴの故郷の名物を買う

【図－12】ボランティア講師（右端）に聞いて店の人側に挑戦した児童

ことや店の人側の会話に挑戦することができたからであるといえる。

以上のことから、身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を単元をとおして活用したことは、活動に使う簡単な英語を聞き取る力を高めることに有効であったと考えられる。

(ｲ)　活動に使う簡単な英語を話す力

【表－18】は、活動に使う簡単な英語を話す力の調査結果である。ｔ検定の結果、事前と事後の差は有意であった。

【表－18】活動に使う簡単な英語を話す力のスピーキング調査の結果

	$\overline{X}$	S	t 値	有意差
事前	6.33	7.44	26.03	＊
事後	63.46	22.30		

注(1)検定方法は【図－8】と同じ

事前テストでは、英単語を日本語のように発音していた児童が多かったが、事後テストでは、多くの児童が正しいイントネーションやアクセントに近い発音で話せるようになっていた。これは、実践において、一人一人が買いたい物をコンピュータ英語教材で自分のペースで調べ、十分練習することができたことによると思われる。さらに、ＡＬＴと帰国子女児童による映像と音声を中心としたマルチメディア教材として開発したコンピュータ英語教材を活用したことによって、コミュニケーションに必要な場面や役割、状況、会話の文脈を児童がとらえることが容易になり、活動に使う簡単な英語に十分慣れ親しむことができたと考えられる。各児童の買い物の様子を自己評価カードに記入できるようにしたところ、たくさん成功した児童ほど、買い物に英語を活用している傾向がわかった。また、単元終了時には、相手に伝えることや、相手の伝えたいことを理解する努力が大切であることを意識し、買い物以外でも英語を使おうとする児童が多数いたことが、自由記述からわかった。

以上のことから、身近な英語に触れることができるコンピュータ英語教材を単元をとおして活用したことは、活動に使う簡単な英語を話す力を高めることに有効であったといえる。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

１　研究のまとめ

仮説に基づいた実践の結果、指導の手だてとして、コンピュータの特徴であるマルチメディア機能を生かして、ＡＬＴと帰国子女児童の模範映像・音声をもとに開発したコンピュータ英語教材を単元「買い物活動」で活用し、身近な英語に触れることができるようにしたことは、英語活動における主体的なコミュニケーション能力の育成を図るうえで有効であったことが確かめられた。

２　今後の課題

この研究では、「総合的な学習の時間」の英語活動における主体的なコミュニケーション能力を育成する指導の在り方について、実践的に明らかにすることができた。

今後は、英語活動を位置付けた「総合的な学習の時間」の年間指導計画の作成と「買い物活動」以外の体験的活動へのコンピュータ英語教材の活用を含めて、基本構想に基づく「総合的な学習の時間」の英語活動の授業実践を重ね、検討していくことが必要である。

【引用・参考文献】

辻功著　「教育調査法」　誠文堂新光社　1970年
細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編集代表　「新教育学事典」　第一法規出版株式会社　1990年
伊藤嘉一著　「小学校英語学習　レディーゴー」　ぎょうせい　2000年